

東電福島原発事故の出版

最適な状況を作る社会へ

11日で未曾有の東日本大震災の被災から10年を迎える。無所属、元原発事故収束担当大臣の細野豪志衆議院議員(49)＝千葉県第5区選出＝はこのほど、東日本大震災の被災で発生した東京電力福島第1原発事故について書いた「東電福島原発事故自己調査報告」深層証言と福島復興提言・2011+10(開沼博編、徳間書店刊。341円)を発売した。

細野さんは東日本大震災の発生当時39歳で、内閣総理大臣補佐官を務め、政権中枢内閣で大災害を間近で体験し、対応に当たった。6月に原発担当大臣、9月に環境大臣に就任し、原発事故への対応に努めるなど、事故発生直後から、政権の事故対応や政治決定に加わった政府高官の一人。

御殿場、小山両市町でも、大震災により、神社の鳥居や石垣の倒壊、大規模停電の発生で、停止した信号機の代わりに付近の住民が

手信号で交通整理をするなどの姿が見られた。JR御殿場線が不通になり、帰宅時間帯と重なったため、帰宅困難者が発生した。沼津、三島両市などの高校に通う学生は帰宅できず、保護者の迎えを待たなければならなかった。様々なデモが流れ、大量の神奈川県民が市内に押し寄せて給油したため、燃料の売り切れが続出した。

原発事故の影響によるその後の計画停電で電力供給が制限されたため、市内の事業所は苦勞して営業し、一般住宅のオール電化も普及し始めた頃だった。で、電化した家庭でも日常生活に苦勞していた。原発事故により、福島県にあった日本サッカー協会のJFAアカデミー福島が市内に拠点を移し、帰還を目標に避難生活を送りながら市民と交流する生活が始まった。

細野さんは大臣退任後も毎年、何度も福島県を訪れ、被災した県民らと交流し、関わ

てきた。後援会員とも年に1回、研修や勉強会などとともに福島県を訪れ、被害や復興状況を学ぶなど、被災民と県東部住民との交流促進、理解を深めることなどに尽力した。

細野さんは「10年が節目。20年経つと忘れられてしまう。風化させないために何が起ったのかを書くことを決めた。これまでの10年間、福島県に關わってきた、課題が改めて鮮明になった。被災地が目覚ましく復興していく姿も見てきた。次の10年で被災地の問題を解決したい。責任を最後まで全うする覚悟」と動機を話した。本書は、原発事故に対し、細野さん自ら検証し「歴史法廷で罪を自白する覚悟を持って書いた」と述べている。初代原子力規制委員会委員長、元陸上自衛隊東部方面総監、前大熊町長などとの対談形式で描き、復興初期の平成23年から24年末までに行われた政治決定が、その後の福島県の復興と国の在り方

福島原発事故
自己調査報告

深層証言と福島復興提言・2011+10

著者 細野豪志
編者 開沼博

私は歴史法廷で
罪を自白する
覚悟を持って
本書を書いた
——細野豪志

発行された新刊本

どのよう影響を与えたかを明らかにしている。この時の政治判断が社会不安や理不尽な事など新たな課題を起すに至ったと指摘した。

細野さんは今後10年で取り組むべき課題に▽処理水▽土壌の除染

▽甲状腺検査▽食品の放射線物質の基準値▽町村合併など6項目を挙げ、踏み込んだ解決策を示した。

下の社会状況を解決するのにも通じる。リスク(危険性)を適切に受け止める社会、市民全体で最適な状況を作り出していく社会にしたい。」などと話した。